

今年もまたヒロシマ、ナガサキの季節がやってくる。敗戦四十周年だけに、戦後わが国論壇のメイン・

テーマであった平和問題の

推移を顧みる

ことも無駄で

はあるまい。

この点で、

波 小 波 大

先日の本欄もとりあげてい

た『世界』創刊四十周年の臨時増刊「戦後平和論の源流——平和問題談話会を中心」は有益な企画だが、

こうして読みかえしてみる

と、戦後日本の代表的知識

人を連ねたこれだけの豪華

メンバーで、平和論はもと

より、日本の将来像をめぐ

つても大いに論じてきたの

久野収、丸山真男、吉野源

三郎、石田雄、坂本義和、日

高六郎といった岩波文化人

の未発表討論や『世界』の

元・現編集長の対談は、こ

うした幻を映像と見て、そ

岩波平和論の現在

8/1

に、それらの言論は今日、

論壇のごく一部以外では雲

霞のように消え去ってし

まっています、まるで幻のよ

うなものであることを痛感

する。

れをつかもつと必死にあが

いているかのようだ。退役

して世間から忘れ去られて

いる老将軍が自分の戦果を

孫に一所懸命語っている姿

にも似ている。

それにしても、この臨時

増刊、いや岩波平和論の現

在における致命的な問題点

は、平和問題談話会の議論

や声明の起草にもっとも大

きな役割を演じ、現在は岩

波にとってもっとも危険な

人物になってしまった清水

幾太郎を欠落させているこ

とである。もとより討論や

資料に清水の名は出てこざ

るを得ないが、清水をはず

して語られる岩波平和論

は、まるでワサビをぬいた

鱈のようなものだ。

(平和屋)